
抽選魔王

国高ユウチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

抽選魔王

【Nコード】

N9022M

【作者名】

国高ユウチ

【あらすじ】

望月輝弥は『立てば芍薬座れば牡丹歩く姿は百合の花』を体現した傾国の美少女。文武両道でならず彼女は、その美しさ故にトラブルによく巻き込まれた。道を歩けばストーカー続出。学校へ通えば牽制しあう学生で友人はほぼゼロ。公共機関を利用すれば痴漢の数は三桁を超え、望まぬ奴隷志願者は絶えず付きまとう。そんな彼女の元にある日一通の葉書が届いた。『当選おめでとうございます』。懸賞葉書に応募した記憶のない彼女は、首を捻り読んだ葉書の内容に失笑した。そこには魔王に当選しましたと書いてあったのだから。

冗談交じりで幼馴染と義理の弟を四天王の欄に書き込んだ瞬間、彼女の部屋は白い光で包まれた。

美しすぎる故に望まぬ想いをぶつけられる地味に不運な美少女の巻き込まれ新米魔王生活。逆ハーです。

抽選魔王簡易登場人物紹介「随時更新します」

もちつきかくや
望月輝弥

癖がつかないほど真っ直ぐで艶やかな黒髪に夜を写した黒い瞳を持つ傾国の美少女。

切れ長の眉に、くつきりとした二重の瞼。スタイルも抜群で、顔が小さいため実際の身長よりも背が高く見える。括れたウエストの半ばくらいまで豊かな黒髪に覆われているがそれほど手入れしているわけではない。

性格は淡々としている部分があり、基本的に誰かに関心を持たれるのを望まないが、その容姿ゆえにささやかな望みは叶うことはない。

やまだたろう
山田太郎

平凡を絵に描いたような人物。

固い髪を短く刈り込み開いてるかどうか判らない細目をした輝弥の幼馴染。

何をしても平均点で容姿も並な彼が輝弥と親しいのは学校でも七不思議の一つであるが、本人は呆れるほどのマイペースで全く気にしていない。

唯一の特徴は190cmを超える長身だが、そのせいで動きがゆっくりに見えるのでのんびり屋と思われがち。

もちつきくりすとふあー
望月クリストファー

緩く波打つ金髪に蒼目の輝弥の弟。

王子的高飛車発想の持ち主だが、唯一母と輝弥には可愛らしい素直な性格を露にする。

輝弥よりも身長が低いがそれを利用する周到な部分もある。

美しく聡明な姉を出会った瞬間から猛烈に慕う子供。

イギリス人と日本人のハーフである。

気がつけば疾走中

いつも、鏡越しに見ているだけだった。

羨望、あるいは嫉妬。

笑顔が溢れるその場所を見て。

助けてと、叫んだ声が届くよう。

強く、強く願った。

「何で、私はこんな目にあってるのかしら？」

輝^{かくや}弥は、全力で走りながら呟いた。

こんな事さえなければ、結構いい日になったのかもしれないのに。

視線を上げれば、眩いお日様。周りは豊かな自然に囲まれていて、絶好のピクニック日和だ。頬を掠める風も、心地よい。

丘の上に見える大木は、まるでゆっくり休んでいってよと語りかけてくるようだ。

しかし、そんな他愛無い想像は、後ろから聞こえてくる爆裂音に遮られた。

ふと振り返ると、先ほどよりも確実に距離を詰めた物体が、ぐんぐんこちらに向かってくるところだった。

追いかけてくるのは、地球ではついぞ見かけることのない様な生き物。

見上げるような巨体に、大きい口。その中には、健康そのものです、とばかりにキラキラと白く輝く歯が綺麗に並んでいる。ガチガチと歯を鳴らしながら追いかけてくる様は、『さあ、今から餌を食べるぞ』と語りかけてくるようだ。

「何、冷静に呟いてるの！何とかしなきゃ！」

隣で叫ぶ彼の言い分もよくわかるのだが、茶色い鱗で覆われたその巨体を、自分にどうしろと言うのか。

終いには、輝弥かくやの顔を三個並べたよりも大きい掌から、鋭い爪を出して振り回してきた。

勢いよく振り回されたそれは、ホームランバッターのスウィングよりも大きな音を立てて、目の前の大木に突き刺さった。

砕け散った大木を横目に、輝弥かくやは一つため息を吐く。

鬱ふさになる気分とは裏腹に、心地よい風が輝弥かくやの顔を掠めた。

当選葉書。結果は魔王様！？

はじまりは、一通のはがきだった。

「当選おめでとうございます?」

いつも通りに学校から帰って、いつものように郵便ポストを覗き込む。そんないつもを繰り返していたはずの彼女の元に、今まで見たこともない内容のはがきが送り届けられた。

思わず少女は小首を傾げた。

少女の仕草にあわせ、腰よりも長い漆黒のストレートの髪がさらりと揺れる。女性なら、誰もが羨みそうな艶やかな髪を、少女は無造作に流していた。

少女の名前は、望月輝弥。

名は体を現すと、昔の人は言ったものだが、彼女はまさしくその諺を体現していた。すっと切れ長の瞳に、筆で描いたような眉。美しい曲線を描く肢体。『立てば芍薬 座れば牡丹 歩く姿は百合の花』と、古風な言葉で言い表すことが出来る雰囲気。絶世の美貌を誇る彼女は、昔の御伽噺に出てくる姫となぞらえ、カグヤ姫との呼ばれることもあるほどだ。

玄関のポストの前でたたずむ姿さえ、まるで一枚の絵のように美しい。

先ほどから、彼女を見つめてため息を落とす外野が少しずつ周囲に群がってきていたが、彼女の関心は目の前のはがきにのみ集中していた。

「…私、懸賞はがきなんて出した覚えはないんだけど?」

手元にあるはがきをもう一度見て、一つため息を吐く。

いつまでも玄関で立ち竦む訳にもいかず、取り敢えず輝弥は玄関のドアを開けた。

「ただいま」

「お帰りなさい、お姉さま」

靴を脱ぐために下を向いていた輝弥は、不意の衝撃に倒れそうになった。微妙に浮いた右足の爪先を何とか地面につけ、体制を立て直す。視線を胸元にやると、金色のひよこの様な綿毛が見えた。無言でそれを撫でまくる。

すると、胸元から、クフクフという笑い声が聞こえた。

「今日は、遅かったんですね」

大きい蒼の瞳を輝かせるその姿は、まるで主の帰りを喜ぶ子犬のようだ。全身で自分の帰りを喜ぶクリスに、輝弥は目を細めた。

クリスは本名望月クリストファー。

血は繋がってないものの、れっきとした輝弥の弟だ。自分より二つ下のクリスを、輝弥は殊のほか可愛がっていた。

「もうすぐ、ご飯が出来ますから。制服着替えてきてくださいね」

踊るような口調で、クリスは輝弥を誘う。

それに逆らうことなく、輝弥はクリスの後に続いた。両親共働きの輝弥の家では家事は交代制だ。今週はクリスが当番のため、彼はヒラヒラのエプロンを翻して上機嫌で歩く。跳ねるように歩く彼の髪が、リズムに合わせてふわふわ揺れた。その髪を撫で回したい衝動と何とか戦い、階段でクリスと別れ、自分の部屋に上がる。十二畳と少し広い自分の部屋に入ると、輝弥はそっとドアを閉めた。

輝弥の部屋は、無駄なものがない。

殺風景な部屋の中にあるのは、ベッドとクローゼット、そして勉強机のみだ。学校や道端で知らない人から貰うプレゼントは、小学校の時に愛らしいウサギのお人形の中に盗聴器が発見されてから、幼馴染に受け取り禁止にされた。元々輝弥は物欲が薄い。ごたごたと飾り立てるのも好みではないし、気付いたらこんなシンプルな部屋になってしまった。机の上に鞆と、先ほどののはがきを置く。ちやっちやと着替えを済ませようと、クローゼットから着替えを出し、制服を脱ぎ始めた。

濃紺のブレザーの制服は、体の線に沿った作りになっていて、スタイルのよい輝弥の曲線を浮き立たせている。ブレザーの上着のボタンをはずしスカートも脱ぐと、そっとハンガーにかけた。中に着ていたブラウスは洗濯に出すためにベッドの上に放り投げる。ゆったりとしたトレーナーにジーパンを履くと輝弥は一つため息をついた。体を締め付ける洋服よりもやはりこの方が落ち着く。

髪の毛を一本に纏め白のゴムで結んでいると、唐突に部屋がノックされた。

コンコン　ココン

その音を聞いて、不意に輝弥の表情が柔らくなる。

こんな風にリズムをつけて自分の部屋のドアをノックする相手など、昔から一人しかいなかった。

「どうぞ」

「輝弥、ご飯だって」

ドアを開け、顔を出した相手が自分の想像通りだったのでますます輝弥の顔が緩む。

決して身長が低いわけではない輝弥だが、自分よりも身長が三十センチ以上は高い彼と視線を合わせようとすると、いつも首をつりそうになる。山田太郎と言う名前の、全てが平凡でいる彼にとって、唯一の特徴がその身長だった。

細い目をしている所為かいつも笑っているように見える彼は、成績も運動も、果ては名前さえもこれと言った特徴はない。いや、ある意味アンケートの例題に使われるような名前は特徴といったら特長なのかもしれないが、それでもその薄すぎる印象の所為かイチローやジローなどによく間違われることが多かった。

背が高いために普通と同じ速度で何かをしても、全てがゆつたりおつとりに見えてしまう彼が、輝弥の幼馴染兼親友をしていると言うのは、二人が子供の頃から不思議だと囁かれていたことだ。

最も、当人たちからすればそれは余計なお世話といったところである。輝弥にとって太郎ほど安心できる相手はいなかったし、気の合う友人もない。高校が分かれてしまっても付き合いがあるのはその所為だ。性別など関係なく、輝弥は一番太郎を信頼していた。

「何かあつたの、輝弥」

言いながら彼はそつと輝弥の頭に手を乗せた。昔からの、輝弥の様子がおかしいと思ったときの彼の癖に、輝弥はくすぐったそうに笑う。クローゼットから座布団を取り出し、太郎に差し出すと、そこに座らせた。小学生の時に太郎から貰った柴犬の絵柄のプリントされた手作り座布団は、手作りした本人以外を乗せることがないため、今では太郎専用になってしまっている。

机から先程のはがきを手に取ると、視線を合わすために輝弥はベッドの端に座った。

「これ、何だと思う？」

「…はがきじゃないの？」

「そうなんだけども。…内容を見て欲しいの」

「内容？『当選おめでとうございます』？何、これ懸賞はがき？」

「みたいなんだけど、私これに心当たりないんだよね」

「って、前みたいに自称輝弥の守り神さんが勝手に送ったんじゃない

いの？」

「真面目に答えてよ…」

鳥肌のたつた腕をさすりながら、輝弥は呟く。小学生の頃、自称輝弥の守り神を名乗る、傍から見たらストーカー丸出し男のことを思い出し、気分が悪くなった。あの時は、毎日頼みもしないのに、花束やおもちや、果ては高級なビスクドールなどが毎日送られてきた。最悪だったのは、本人お手製らしいメッセージテープ。それはすぐさま太郎に取り上げられ、輝弥は内容を聞くことはなかったけど、あれほど真っ青な顔をした太郎を見たのは後にも先にもあの時だけだ。昔から、ほとんど動揺を顔に出すことがない太郎があそこまで顔色を変えたのだ。きつとんでもない内容のメッセージテープだったのだろう。ちなみに、自称神様は今はこの国にはいないらしい。

「結構本気の言葉だったんだけど…」

「タローちゃん！」

「ごめんて。あ、裏は見たの？」

「裏？そう言えばまだ見てない」

「…普通、先に裏を読まない？」

「だって、帰ってきたばかりだったし。変なことが書いてあった場合、一人でいると何となく怖いし」

「まあ、その気持ちもわからなくはないけど。じゃ、裏を読んでみようよ」

「うん」

はがきを持つ太郎に顔を近づける。輝弥が見える位置まで来たのを確認すると、太郎ははがきを裏返した。

「……………」

「あはははは」

無言になる輝弥とは対照的に、心底面白そうに太郎は笑う。それを一瞬恨めしげに見てから、輝弥は太郎からはがきを奪った。もう一度、ゆっくりと読んでみるが内容は変わることはない。

『おめでとうございます。あなたは抽選で魔王に選ばれました』

何度読んでもそう書いてある。

「…何、これ？」

「さあ？よくわからないけど抽選で魔王に決まったって事じゃないの？」

「もう、人事だと思っではぐらかさないでよ！」

「って、言われても。とりあえず、輝弥に送られてきた手紙の中で一番インパクトがあるよね」

「朗らかに笑わないでよ。どう考えてもサイコな人からののはがきじゃない」

まるで病原菌を触るように、指先だけではがきをつまみながら輝弥は半泣き状態で笑う。昔から届けられた手紙の中でも、トップを争う怪しさだ。ちなみに、今までの中でトップは『サイルティの姫に迎えます。あなたこそ我が后にふさわしい』とつらつらと三百枚にも及ぶ長編だ。百二十三枚でダウンした輝弥を傍目に、太郎は全部を読みきりさらに感想文まで相手に提出した。

「でも、特に害はなさそうじゃない。…あ、ほら見てみて。四天王に従者までが選べるらしいよ？」

ほらここ、と太郎が指差した部分を見ると、確かにそこにはそう書いてあった。

『括弧の中に、四天王及び従者となる者の名前を記入してください。読み上げた瞬間から、彼らはあなたの僕です』

ご丁寧に、等間隔に並んだその括弧の後ろには、必殺技と書かれた括弧まで合った。

「派手派手しい見た目と言い、これはもう手作りだね。…コレ、もしかしてドラゴンのつもりだったのかな？」

興味津々とはがきを覗き込む太郎に、輝弥の頭に怒りのタコマークが浮かび上がる。いくらなんでも、もう少し心配してくれてもいいのではないのだろうか？ギツと鋭い視線で太郎を睨んでみるも、相手は全く気付いていない。自分のしていることに虚しさを覚えていると、ドアをノックする音が聞こえた。

「お姉さま、ご飯はができました」

控えめにドアを開けたクリスは、輝弥を見つけると嬉しそうに近寄る。座っている輝弥の腰元にぎゅっと抱きつくと、その傍にいた太郎に冷たい視線を向けた。

「ちょっと。お姉さまを呼びに行くのに何分かってるのさ。ったく、これ以上ないくらいの役立たずだね」

フンツと輝弥に対する時とは全く正反対の態度で見下したように言うクリスに、もう慣れたとは言えやはり苦笑がもれた。初めて会ったときから、極度に自分に懐いてくれるクリスは、気付けばかなりの王子様気質だった。

生粋のイギリス人の血を継ぐだけあって、見た目は金髪碧眼、まる

でマシユマロのように白いほっぺに、柔らかそうな唇。今は可愛いと言う言葉で括られているが、何年かたてばかなりかっこいい男になるであろうと容易に予想できる顔立ち。さらに、彼は輝弥と同じで運動も勉強も苦手ではなかった。コレだけそろっていて、周りにちやほやされれば王子様気質になっても仕方ない気がする。

以前は、太郎に対する態度も一々注意したのだが、太郎自身が面白がっている節もあり、注意することもなくなった。

「ああ。ごめんごめん。折角可愛い顔してるんだから、そんな表情しない方がいいよ」

「っ。ちよつと背が高いと思って、馴れ馴れしく僕の頭を撫でるなっ」

「あははっ。ごめん」

「全く、悪いと思っただろうっ」

じゃれ合う二人を横目に、つまんだままのはがきを見る。一体誰がこんなものを寄こしたのか。

赤と黒で縁取りされた『おめでとうございます』という文字を見て、輝弥はため息を吐く。そして、勉強用にと教科書と共にベッドサイドに置いてあったペンを取ると、目の前の二人の名前を書き入れにんまり笑った。コレくらいのもは許してくれるだろう。しかし、そんな輝弥の考えは、途轍もなく甘かった。例えて言うなら、メイプルシロップたっぷりなのに、『これじゃあ、甘味が足りない』と言って生クリームと蜂蜜をぶっ掛けられたホットケーキ程あまかった。

「山田太郎、望月クリストファア。汝らを四天王が一員に。魔王である我が僕とす」

即効で思いついた言葉を、呟いた瞬間に輝きだしたはがきを見て。

後に輝弥はこう言った。

『後悔、先にたたず』と。

下着は標準装備？

「で、ここは何処なのかしら」

目が覚めての第一声がそれだった。見上げた天井は、見覚えのないもの。木で作られているらしいそれは、時代劇などで見る和風建築そのものだ。古びている建物なのだろうか。天上にはぼつぼつと所々しみが出来ていた。

くらくらする頭を抱え、どうにか身を起こす。二三度頭を振って、再び辺りを見てみたものの、視界に映るものが変わることはなく。小さくため息を吐く。輝弥の知る乏しい建築知識の中でも、貧乏長屋と言う言葉がピッタリな造りは今にも何か出てきそうな雰囲気満々だ。

よれよれとした布団をめくり、勢いをつけて体を起こした。

「ん…」

隣で聞こえた声に視線を向けると、そこには小さく丸まって眠るクリスが居て。幼子のように布団を握り締める姿は微笑を誘うが、その容姿に和風のボロ布団は恐ろしく似合っていないかった。

反対隣を見ると、一組の布団がたたまれていた。この雰囲気からして恐らく太郎が眠っていただろうそれは、触れてみても冷たい感触を返してくるだけだった。

再び、輝弥は小さくため息を吐く。

太郎の事だから大丈夫だろうとは思うが、勝手に行動するのではなく自分の事を起こしてくれればいいのに。

最も、起こされたからと言って自分が素直に起きるかと言えば必ずしもそうではないだろうが。

「クリス。…起きなさい、クリス」

いつまでも考え込んでいても仕方ない。そう、結論付け太郎を追うべくクリスを起こしにかかる。輝弥とは違い、寝起きのいいクリスは直ぐに目を覚ましてくれた。

金色の長い睫毛を何度も瞬かせ、瞳の焦点を合わせ輝弥を認める。

「お姉さま。おはようございます」

につこりと満面の笑顔で言われ、つられて笑顔で挨拶する。一瞬間の後、頭を振って気を取り戻した。

「和んでる場合じゃなくって」

額に手をやる輝弥を見つめた後、クリスは廻りを眺めた。二人の間に短い沈黙が生まれる。先に口を開いたのは、クリスだった。

「…ところで、ここは何処でしょう？」

そんな事はこつちが聞きたい、と思わないこともなかったが口に出すことはしない。先程、自分も通った道だ。クリスが眠っている間に、自分なりに推察した答えを言おうと口を開いた。

「魔界だって」

自分の口から出たと勘違いしそうなタイミングだったが、言ったのは自分ではない。声の聞こえた方を振り向くと、そこには襖をに手をつく幼馴染の姿があった。

「タローちゃん？」

見慣れたはずの幼馴染の姿のはずなのに、疑問符がついてしまったのはその姿のせいだ。襖に頭をぶつけない様にしゃがんで中に入ってきた彼は、恐ろしくこの場に合わない格好をしていた。

「何、その格好は」

太郎は、まるで、流行のオンラインゲームから抜け出したような格好をしていた。役職で言うのなら戦士だろうか。イメージは黒。黒のマントに、黒の胸当て。黒のスボンに、黒のバンダナ。まさしく全身黒尽くめといってもいい。甲冑もどきは長身の太郎に案外似合っていたが、日常生活で見るとは少々…と言うよりかなり異色を放っている。

幼馴染の身に一体何が起ったのか。少なくとも、輝弥の知る彼は、文化祭でもないのにこんな格好をする趣味はなかったはずだ。それとも、日常から離れてしまったこの場所で新しい趣味に目覚めたのだろうか。それなら正直心の距離が開きそうだ。

目は口ほどにものを言っている輝弥に向かい、太郎は元々細い目をさらに細めて笑った。

「違っって」

苦笑しながらパタパタと顔の前で手を振る。それでも尚疑り深い顔で自分を見る輝弥に、そっと持っていたものを差し出した。黙って受け取ったクリスとは違い、思わず輝弥は躊躇した。

「何、コレ？」

「服だけど？」

「…そう言う意味でなくて」

がくりと脱力する輝弥に、爽やかに太郎は笑顔を向けた。

「とりあえず、コレに着替えて？」

「何で？」

「家主の希望」

淡々と会話を繰り広げる輝弥と太郎の間に、クリスが無理やり割って入る。

「どうして、僕がこんなの着なきゃならないのさ！」

早速広げていたらしい服を、目の前に持ってこられる。まるで、絵本の中の王子様が着そうな服だ、というのが輝弥の第一印象だった。太郎の服とは正反対のイメージのそれは、純白を基調としていた。真っ白なブリブリのレースがまぶしいブラウスに、青のシックなイメージのズボン。ご丁寧に、胸元に結ぶらしいスカートと、おそろいの真っ赤なマントまであった。それを着ているクリスを想像して、思わず輝弥は笑みを漏らす。

「すっごく似合いそう」

「え？」

ポツリと聞こえてきた言葉に、クリスの耳はダンボになる。太郎に押し付けようとしていた服を一瞬で自分の胸元まで引き寄せると、先程とは違って変わった笑顔を浮かべた。

「と、思ったけど特別に着てやるよ。感謝するんだね。……直ぐ着替えてきますから、待っててくださいねお姉さま」

スキップしそうな勢いで、部屋の中にあつた衝立の後ろに行く。そ

の変わり身の速さはいつそ清々しいほどだ。

「はい。コレは輝弥の」

その姿を見送っていた輝弥の手に、無理やりと自分の持っていた服を押し付け太郎は笑った。鮮やかな手口は、昔からの付き合いなればこそだが、今となっては忌々しい。

「私は、着替えたくないんだけど」

言っても無駄だとわかっていても、最後の抵抗とばかりに言葉に力を込めて言ってみる。

「うん。でも、宿主の意向だから」

あっさりと輝弥をいなすと、太郎は輝弥の手を握った。引かれるままについて行く。

先程は見えなかったが、部屋の横手には小さなドアがついていた。ここまで和風家屋なのに、ドア？と思わなくもなかったが、そこまで行くと太郎が何を言いたいか輝弥にも察しはつく。

「ここで着替えろって？」

「そう言う事。…寂しかったら一緒に居てあげるけど？」

「タローちゃん、それセクハラ」

「あははっ。俺と輝弥の間で今更じゃない。ま、今のところはクリスも居るし大人しくドアの外で待ってるけどね」

クスクスと笑いながらドアを開けてくれた幼馴染に苦笑する。確かに、子供の頃は一緒に風呂に入ったこともある間柄だから今更と云えないこともないが。

柳眉を下げて苦笑する輝弥に太郎は笑みを深めると。

「あ、そうそう」

「まだ何かあるの？」

「うん。はい、コレ」

渡されたのは、白く手触りのいいリボン。所々金の刺繍の入っているそれは一目見ただけで高級とわかる代物だ。

「くれるの？」

「さあ？預かり物だから、俺は判断しかねるけど。後で本人に聞いてみたら？」

「そうする」

とりあえず受け取って、今度こそしっかりとドアを閉めた。リボンを渡された、と言うことは髪の毛を結べと言うことなのだろう。

部屋の中は先程の和室よりは貧乏くさくなかった。自分の家と比べると古臭く感じるが、別に気になるほどでもない。昔、テレビアニメで見たことのあるようなファンシーなつくりのベッドに、先程受け取った服を置いた。

手始めに、髪を纏めていたゴムをはずす。まるでシャンプーの宣伝のように綺麗に広がる黒髪は、それだけで賞賛されてもよいほどの極上品だ。天使の輪が浮かぶ顔にかかる髪をそつと耳にかけ、ベッドの上に置いた服を広げた。

「何なの、コレは…」

思わずため息を吐きそうになったものの、何とか堪える。先程のクリスではないが、太郎に向かってこんな着れるかと叫んでしまいたい気分になった。

「チャイナドレス・・・？」

胡乱な眼差しで眺めつつ、輝弥はその物体を持ち上げた。しゅるりと衣擦れの音を響かし広がるそれは、何処からどう見ても自分の世界にあるチャイナドレスと言うもので。コレを用意したと言う家主に、思わず殴りこみをかけたくなる。

「しかも、情熱の紅ですよ」

前髪に手を突っ込み苛々とかき回して目の前の服を睨み付けた。だが現状が改善されるわけでもなく、嫌々ながらに体に当ててみる。寝ている間に計ったんかいと言いたくなるくらいピッタリサイズのそれは、体に当てると腰元すれすれまで深いスリットが入っていた。深い紅色のチャイナドレスは一目見て上質なものとわかるが、着たいと思う感情と服の質は別問題だ。金の糸で中国風のドラゴンの絵柄が刺繍されているそれは、ザ・派手と言う呼び名を差し上げたいほどだった。

持っていた手を離し、くるりと回れ右をする。そのままの勢いで思い切りドアノブをひねった。

ガチャッ

「！？」

鈍い音を発し、異様な感触を伝えるそれに輝弥の柳眉はつりあがる。

「絶対に着てね」

ドアの外から聞こえるのは、上機嫌な幼馴染の声。

閉じ込められたと気付いた瞬間、輝弥からもれたのは諦めのため息だった。長年付き合っているが、こうなった太郎は折れることをしない。平凡で固められていると周りに認識されているはずの太郎は、こと輝弥に関しては全く譲らない一面も持っている。未だかつて太郎が決めたことに、輝弥は一度も逆らえたためしはない。凡庸な振りをしてくせに押しが強い彼の本質に、どうして周りは気付かないのか。

渋々とまた部屋の中央に戻り、鬱屈した気分させるチャイナドレスを拾い上げた。

仕方なしにトレーナーとズボンを脱いでベッドの上に放り投げる。たたむのはとりあえず後回しにして服を着た。不思議と手に馴染む感触の布を掴み、頭からかぶる。先程も感じたことだが、本当にピッタリのサイズに思わずうめき声を上げたくなった。

裾のないそれは、些か寒く感じるもののデザインにはそれほど嫌いではない。足首付近まで隠れるロングサイズのドレスの、着てみると益々きわどいスリットの入り方に頭が痛くなった。

鏡があれば全身を確認してみたいところだが、あいにくと部屋の中を見回してもそれらしきものは見つからなかった。諦めて、先程脱いだ服をたたもうと思えばベッドを見る。

「ない？」

先程確かに置いたはずの衣服は、輝弥が探す限り部屋の何処にも見つからなかった。どういふことかと思い、慌てて部屋の外にでる。

「タローちゃん！」

「うん？」

先程とは違い、あっさりと開いたドアの外の人と呼ばれてこちらを振り返った。しかし、そのままウツトリとどこか遠い目をする彼に、

思わず輝弥は一步後退した。

結んでいない髪が揺れ、しゃらりと頬に当たる。黒髪は窓から入る微かな光を反射して艶やかに光った。

「いやー、想像以上に似合ってて嬉しい限りだよ」

ぱちぱちと暢気に賞賛の拍手を送る幼馴染に思わず拳を握り締める。そんな感心をされても嬉しくない。

しかし、そんな輝弥の様子を知ってか知らずか。否、正確には理解しつつあえて無視して薄着の輝弥の肩に、ふわりと何かをかけた。

「そのままじゃ寒いでしょ？」

につこりと首を傾げて言われ、肩に乗ったものを手に取る。

それは、カンフー服のような上着。チャイナドレスの上にそれを着ると、あつらえたようにピッタリとフィットした。長めの上着は腰のラインを少し超え、際どいスリットも多少はごまかしてくれる。

その事に輝弥は安堵した。

胸の前にある紐を結ぶ。独特の形をした上着は、合計四箇所も紐を結ばないと完全に前を閉じることが出来なかった。

すっかり結びきり、上着を引つ張る。手首まで隠してくれるが、チャイナ服と同色のど派手な紅は心持ち落ち着かない。改めてみると、チャイナドレスと同様に所々に金の刺繍がしてあった。

「うん。上着も似合うね。…綺麗な体の線が判りにくくなるのは残念だけど」

「…そりゃ、残念なことだ」

うんざりした顔で幼馴染の顔を見る。表情の読めない彼は、マイペースに事を進めた。

「で、聞きたい事があつたんじゃないの？」

太郎に言われて、先程の事を思い出す。

「忘れてたつ。服が無くなったの！ちよつとの間しか目を放さなかつたのに」

「あー、やっぱり」

「やっぱりって…」

「俺の服も先刻家主と話してる最中に消えちゃったんだよね」

「……」

想像して、思わず無言になる。

きつと、いきなり素っ裸になったとしても彼はあまり気にしなかつたに違いない。飄々とした顔で、『あれ？服が消えちゃった』と言う程度だろう。

全裸でもものうと笑顔を保つ幼馴染の姿が克明に脳裏に浮かび、輝弥はさすがと頭が痛んだ。羞恥心がないのではないが、彼の感覚はどこかずれている。

「まあ、それを思えばまだタイミングが良いじゃない。そろそろ下着も消える頃じゃないの？」

あつけらかんと言われて、思わず胸に手を置く。そこにはあるはずの感触がなくなっていた。

そつえば先程から股間の辺りがスースーする気もする。

嫌な予感に額から汗が滲み出た。きつと顔色は青ざめているに違いない。

「ちよつと、タローちゃん…一つ聞きたい事があるんだけど」

「何、輝弥」

ニコニコと普段どおりの顔で笑う幼馴染を下から見上げる。

「この世界の人間は、下着を着ないのかしら？」

「いや、着るんじゃない？俺も今着てるし」

「だったら、どうして私にも下着をくれないのよ！」

「あ、下着は基本的に標準装備なんだよ」

「はあ？」

「よく判らないけど、着ているイメージを保てば具現化されるらしいよ。本当は服もそうらしいけど、慣れるまでは難しいからって。取り敢えずは見えない部分から練習するのがいいってことらしいけど」

「・・・ごめん。言ってる意味が微妙に判らない」

「んー・・・俺も今一全部は理解しきっていないんだけどね。力の使い方的一种らしいよ」

「力？」

「そうそう。聞いて驚くなかれ。この世界には、魔法が存在してるんだってさ」

あっさりと告げた太郎の顔を見上げ輝弥は鮮やかに微笑んだ。可憐に咲く野の花も、咲く誇る大輪の薔薇ですら恥らいそうな美しさだが、瞳の色はこの上なく冷めている。

黒々とした瞳の瞳孔を開き、彼女は一言漏らした。

「へえ」

異世界文化との初交流は、幼馴染の手によりつつがなく終了させられた。

白の髪に赤い瞳

着替えを終え太郎に連れられて廊下を歩く。

結局白のリボンは三つ編みをした髪の先につけた。ちなみに結ったのは輝弥ではなく太郎だ。彼は輝弥の髪を弄るのが好きで、今ではヘタな美容師よりも器用に髪を扱うかもしれない。

深紅のチャイナドレスを纏った輝弥は美しく、深いスリットから覗く黒のタイツに包まれた脚線美も見事なものだ。和風家屋っぽい建物の中を歩いているために靴はないが、この下着を出すために必死のイメージを膨らませたのはいうまでもない。

「うん、やっぱり輝弥には赤が似合うね」

隣を歩く太郎の言葉に、輝弥は小さく笑う。細い目を益々細めた彼が嬉しげに手を伸ばし輝弥の結ばれた髪に触れようとした瞬間。ぱちん、と小さな手が彼の掌を打ち払った。

「勝手に触らないでくれる。お姉さまが穢れる」

「ははは、酷い言い草だな。それじゃまるで俺が病原菌みたいだ」
「実際にそれに近いだろ。幼馴染だからって図々しいんだよ」

牙を剥いた子猫の如く輝弥の隣から身を乗り出して威嚇するクリスは、体で隠そうとするかのように身を二人の間に割り込ませる。太郎どころか輝弥よりも身長が低い彼が本気で怒っているのは判るのだが、チワワがグレート・ピレニーズに吠えてるように見え、つつい微笑ましく思ってしまう。

だが今歩いている鶯張りかと確認したくなるくらいに音が鳴るこの縁側で、騒いだり暴れたりはありません。先ほどもクリスが動いたたびに悲鳴のような甲高い音を立てている。二人並ん

で歩くのがやつとの場所に無理やり三人並んでいるのだから尚のことだろう。

「クリス」

「はい、お姉さま」

「いい子だから暴れないで。床が抜けてしまいそう」

「え？」

「さっきから驚より高い声で鳴いてるな。床もふかふかしてるし」

「判ってるならクリスをからかうのはやめて。タローちゃん一人でも重量オーバーよ、きつと」

「俺だけを責めるの？」

「クリスを先に注意したでしょう？引くのは先に吹っつけたタローちゃんね」

責めるでもなく静かに見詰めれば、ひょいと肩を竦めた幼馴染はポーカーフェイスと変わらない笑顔のまま一步前に出る。重量が変わったおかげで床があがり、軋む音も僅かに低くなる。一つため息を吐くと未だに自分の前に立つクリスを下がらせた。

今のところこの家の構造を知っている太郎が先頭を歩くのが妥当だと思っし、輝弥を護りたいと背伸びするクリスを納得させる配置がこれだった。案の定後ろは頼むと告げれば笑顔で彼は頷く。その様はやはり飼い主に誉められて喜ぶチワワと被り、小さく笑った。

縁側から視線を外に投げれば、日本の昔を描いたアニメのような庭が広がる。椿と似た木で作られた生垣が庭を囲み、砂利をひかれたそこには石が幾つか置かれていた。古びているが詫び錆を感じる趣で嫌いではない。

どこか懐かしさを感じるのは、きっと田舎の風景を思わせる光景だからだろう。

しばらく歩くと、太郎が漸く足を止めた。

今まで通り過ぎた部屋とは違い、きつちりと開かれた障子にピンと来る。この部屋が目的の場所だったのだろう。

首だけを回して振り返った太郎が大丈夫と目で問いかける。幼馴染の声なき声に頷くと、のんびりと彼は歩を進めた。

「連れてきました」

「・・・ありがとう」

中から滑らかな低い声が聞こえる。聞き惚れてしまいうくらい美しいテノールに、髪を揺らして小首を傾げた。

初めて聞く声のはずなのに、何故懐かしいと感じたのか。違和感を感じつつ、促されるままに足を進める。

「初めまして、輝弥ちゃん。ようこそ魔界へ」

井草の匂いが心地よいその部屋の中で、着流しを纏った彼はほわりと微笑んだ。きつちりと正座し背筋を伸ばした姿の彼に息を呑む何にも染まらぬと主張する白い髪に、輝弥の纏うチャイナドレスの色と酷似した紅の瞳。精悍な顔立ちは黙っていれば伶俐に映るだろうに、少しばかり目元を綻ばすだけで随分と魅力的で親しみを持つ。右で別けられた髪はやや長めのショートカット。

紗で出来ているように見受けられる着物は華美ではないが、詭えたように彼に似合った。

「あなたをずっと待っていました」

常套句に聞こえる言葉は、けれど読みきれない感情が込められているように感じ首を傾げる。

どう見ても年上の微笑みを浮かべる美青年が今にも泣きそうな気が

して、伸ばしかけた手をぎゅっと握りこんだ。

小さな勇気で問いただす

その男の容貌は、確かに人目を引くものだった。

輝弥が知る限りでは人生でトップを争うくらいの美形だろう。精悍で男らしい容姿は美しいと証してなんら遜色はないが、しかしながら彼女の目を引いたのは彼の容姿でもなければ腰砕けになりそうな美声でもない。

にこにこ輝かしい笑顔を浮かべながらも高速で動く手とそれにより作り出されていく無機物たち。彼の背後に山となるそれらを眺め、言葉がすぐに浮かばない。

「帰りましょう、お姉さま」

輝弥が動かずに居る間に即効で決断したらしいクリスは、チャイナ服もどきの裾を掴むと引つ張った。顔をやれば綺麗な顔を歪め、不信感一杯で部屋の中の男を眺めている。

帰ろうという気持ちも帰りたい気持ちも良く判るが、ここがどこだか把握できない以上無駄に動くのは得策でないし上策でもない。

ちらり、と伺うように隣を見れば、幼馴染はいつも通りの笑顔でこちらを見ていた。言外に好きにすれば良いと言われているのを感じ、零れそうになるため息を気力で堪える。助けてもらった相手を前に、それは失礼な所業だと理解していた。

裾を掴むクリスの手を乱暴にならないようにゆっくりと剥がす。不満げにこちらを伺う瞳に苦笑すると、一步前に出た。

「あなたがここの家主の方でしょうか」

「うん、そうだよ」

先ほどまであった硬さを捨てた口調は、綺麗な顔には似合っていない

い。どちらかと言わずとも硬質な美貌に合わぬ柔らかな話し方だが、輝弥がそれに違和感を覚えることはなかった。

彼が家主と確認できればすることは一つだ。『魔界』という単語や、動き続ける彼の手に囚われてはいけないと気合で表情を作ると、その艶やかな唇を開いた。

「私達を保護してくださり、ありがとうございます。この衣装も貸していただき感謝します」

一息に言い切ると、深々と頭を下げる。

「お姉さま!？」

「あなたもきちんとお礼を下さい、クリス。何かしてもらったらありがとうございます。そう、教えたはず」

黒々とした瞳でじっと見詰めれば、渋々クリスも頭を下げる。蚊の鳴くような声でだがきちんと告げられた礼に、輝弥は漸く目元を綻ばせた。

ありがとう、ごめんなさいは最低限覚えておくべき礼儀だ。それがどれ程変わった相手に対してだろうとも、してもらったことに対し謝礼を言わないのは筋違いとなるだろう。

ましてここが彼や幼馴染が言うとおり『魔界』などというところでもない場所なら、保護してもらってこの上なくありがたい。もっとも、今輝弥が居る場所から望める風景が魔界の象徴であるなら、それは少しばかり首を傾げてしまう言だが。

輝弥が思い描く魔界はもつとおどろおどろしく、空は常に暗雲で覆われており雷鳴が響き血臭が漂うようなそんなイメージだ。異形の存在が共食いをし荒廃した大地には草一つ、生き物一匹住んでいない。血に飢えた魔物が蔓延り力こそ全てといったイメージが先行している。

しかしながらここはそんな想像と百八十度かけ離れている。

見る限り日本にもありそうなのかな田舎を地でいっており、先ほどから蝶々が何匹も庭を飛んでいた。小鳥の鳴き声は愛らしく、降り注ぐ日差しは柔らかだ。

目の前の男の言葉を信じるならここは異世界と言うことだろうが、どう考えても日本の片田舎に見えた。

しかしながらここが異世界かどうかという疑問より、先ほどから輝弥の脳裏を占めて仕方がない疑問がある。今現在も手早く動く彼の手に、輝弥は釘付けだった。

否、正確に言えばその手が作り出すものに釘付けだった。

干した藁をまとめ部分部分を細い縄で結ぶ。まるで人間の体を形取るように、首、頭、胴体、そこから二股に分かれ二本の足がひょっこりと器用に素早く作られた。輝弥はそれを生で見るのは初めてだが、知識としては知っていた。

だからこそ輝弥の視線は美貌の主そのものではなく、彼の持つものに釘付けだ。

「俺の名前は『サダルメリク』。つい先ほどまでは役職も持っていたんだけど、今はただの『サダルメリク』だ。好きに呼んでくれていいよ。年は1112歳で現在は恋人なし。得意なのは剣術で、今は一人暮らしをしている。趣味は藁細工で、好みのタイプは姉です。他に何か聞きたいことはあるかい？」

彼の言葉に突っ込みたい部分は色々あったが、それら全てを飲み込んで輝弥は日本人の多くがマスターしている愛想笑いを浮かべる。

「私の名前は望月輝弥です。現在は高校二年生で部活委員会には所属していません。ストーカーは何人が居ますが恋人は居ません。特技は自分の身を護ることで、趣味はまったりとした時間を過ごすこと。現在は家族と四人暮らしで、好みのタイプは好きになった人で

す。それで質問なんですけど」

一呼吸置くと、輝弥は彼を見た瞬間から疑問を抱いていた部分を指摘した。

「その、藁細工、私達の世界にある藁人形と言うアイテムによく似ているのですが、用途はなんでしょうか？また、そのように量産している意図を教えてくださいただけると嬉しいです」

ある意味勇気を振り絞った輝弥の問いに、二重の切れ長の瞳を見開いた彼は、じつと輝弥の顔を見詰める。そしてやおら体を震わせる、堪えきれないとばかりに大爆笑した。

斬新な産業

爆笑している彼をじつと眺める。

盛大な笑い方で顔は紅潮しているし、目尻に涙も浮かんでいる。ばんばんと叩かれる畳もどきから埃が出てき、腹が痛いのか空いた片手でしきりにわき腹をさすっていた。

美形は笑い崩れても美形だった。

滅多にない顔立ちをした男が笑い崩れるのを眺めていた輝弥は、服の袖を引かれ視線を向ける。

そこには苦手なGのつく生物を眺めるのと同じ睥睨した眼差しを向けるクリスがいて、苦笑して宥めるようにひよこみたいな髪を撫でれば、こちらに視線を戻し彼は渋い顔をした。

「お姉さま。やはりこいつは変質者です。頭が可笑しい狂人です。

いきなり人にコスプレ衣装を差し出し、魔界云々言う変人です」

「クリス」

「だって変じゃないですか！ここはどう見ても日本の風景です。いきなり意識が落された間に、僕たちきつと誘拐されちゃったんです！僕もお姉さまも可愛いから！」

「クリス。冷静になりなさい。意識を失っている私たち三人をどうやって家から連れ出したと言うの？仮に近所の人たちに気づかれず実行したとして、どうして誘拐した私たちを布団に寝かせる必要があるの？それにここが異世界じゃないと言うのなら、どうして魔法のように私たちの服が消えてしまったの？害ある気持ちで誘拐したのに、どうして見張り一人立てずに自由にさせてもらっているの？」

「それは・・・」

「それにもう一つ。私とクリスが可愛くて誘拐したと言うのならどうして図体ばかり大きいタローちゃんを連れてきたの？」

「・・・ッ」

「おいおい、それって酷くない？俺って身体ばかりでかいだけで可愛くないみたいじゃない。自分を可愛いって言いきるのも、それに対して疑問を持たずにスルーするのも良い根性してると俺は思うよ。確かに美形姉弟だけど」

「確かに・・・。僕とお姉さまを手籠めにしたくて誘拐したなら、こんな図体だけ大きい木偶の棒を誘拐する必要はないですよね」

「って、どうして納得するのかな？しかも俺の言葉はガン無視？お前ら姉弟酷くない？酷いよな？酷いだろ」

わざとらしく大げさに嘆いたフリをする幼馴染に、輝弥は小さく笑いかけた。悪戯っぽく子供っぽい笑い方は邪気がなく、年よりも彼女を幼く見せる。普段は綺麗という言葉がぴったりなのに、そんな顔を見るとファニーフェイスが似合う可愛らしい女の子そのものだった。

「それにもう一つ根拠があるわ」

「もう一つ？」

「そう。私がここを異世界だと信じる理由は、タローちゃんがそう口にしたから」

「・・・お姉さま」

「クリスも知ってるでしょう？タローちゃんは私に嘘はつかない」

渋い顔をしたクリスの頭を撫でると、不承不承彼は頷いた。白い手で輝弥の服の裾をしっかりと握り、どこか悔しげな表情をするが、彼にもそれは否定できない。

山田太郎は輝弥にとって絶対的に信じられる存在だ。輝弥の弟になったクリスも、それを知っている。

「何？ツンの後のデレ？輝弥いつからツンデレになったの？」

「そもそもツンデレって何？」

「この間徹夜で俺と一緒にやったゲームの香夏子ちゃんみたいな人・・・ほら、クリスと似てるって言ってた」

「ああ、あの好きなのに素直になれない、手作り弁当をプレイヤーの顔に投げつけて『あんたのためじゃないんだから、ばかあ！』って言ってた子？」

「そうそう、それ。ま、クリスの場合は輝弥に対してだけデレで、他の面々にはツンという発展キャラだな」

「ふうん。難しいんだね」

「そうだ。恋愛の機微は難しいんだ。次は響子ちゃんを攻略の予定だったのにな」

「って言うか、貴様！僕のお姉さまに何如何わしいゲームをプレイさせてるんだ！」

「えゝ？別に如何わしくないし。ただの恋愛ゲームだよ。R18ってわけでもない」

「それでもギャルゲーをお姉さまにプレイさせたってだけで如何わしいんだよ！お姉さまも、僕が家にいなかったからってこんな奴の家に泊まりに行かないください！こいつも一応男ですから！」

「はいはい」

怒りで頬を赤らめるクリスの頭をぼんぼんと撫でると、漸く笑いが落ちついたらしいサダルメリクが目尻を拭いながら姿勢を正した。息を整えながら指を鳴らすと、どこからともなく座布団が現れる。青地に白糸で柄が刺繍されたそれは、やはり日本でよく目にするものと変わらないように見え、ついつと片眉を上げた。促されるままに座ると、にこり、とサダルメリクが微笑んだ。

「いやあ、急に笑ってごめんね。君の真面目な表情も面白かったけど、その後の会話も負けず劣らず面白かったよ」

「真面目な表情を面白いと言われたのは初めてです」

「そう？なら俺は君の初めての男だつてわけだ。それは光栄だね」

「・・・下ネタは止める。ぶん殴るぞ」

「はははっ！君の弟君は可愛い見目に反して随分と好戦的みたいだ」

「僕を馬鹿にしてるのか！？」

「いいや、違うよ。誉めてるつもりだけど、気に障ったならごめん」

「いい子だから大人しくなさい、クリス。こちらは家主さんで私たちの恩人よ」

「・・・はい、お姉さま」

「よく賤られてるなあ」

「っ！」

「あなたも余計な火種を巻かないでください」

「ごめんごめん。ええと、それで何だっけ。あ、そうだ、この藁細工が何に使われるか知りたいんだっけ？」

「はい。もし、差し支えなければ」

「全然構わないよ。これはね、呪いのアイテムなんだ」

「呪い？」

「そう。怨み辛みのある相手。憎くて仕方がないのに手が出ない相手。ただ単純に利益の為に暗殺したい相手。そんな相手を手を汚さずに呪殺する為の丸秘アイテムなんだ」

一見すると爽やかな笑顔で黒々とした内容を説明してくれた彼は、その後わざわざ使い方まで説明してくれた挙句にプレゼントと称して小指サイズの人形をくれた。小さくとも威力は絶大らしいそれにじっくりと観察してしまう。どこかの土産屋で携帯ストラップとして売ってそんな安っぽさだが、これ一つで何人が纏めて呪うことが出来るらしい。

取り合えず礼を言って受け取ると、彼の笑顔は益々深まる。

ちなみにクリスは嫌そうに指先で摘んでそれをどうしようか迷っている最中で、太郎はにこにこ底知れぬ笑顔を浮かべながら礼を告

げるとさつさと懷にそれを仕舞い込んだ。

クリスはともかく太郎が如何様にしてそれを利用するかは、輝弥は想像したくない。

輝弥たちにプレゼントを渡して満足したらしい彼は、また口を開いた。そして、想像もしてなかった内容を説明しだした。

「ここはね、正確に言うとも魔界じゃなく魔大陸。魔が住み支配する大陸なんだけれど、この呪殺アイテムはこの主な産業なんだ」

「産業？」

「そう。魔大陸に住む魔族と呼ばれる俺たちは、他の大陸に住む面々よりも魔力が著しく多い。この魔大陸は自給自足できる程度に農作物は育つけれど、輸出するほどのものは取れなかった。他とは違い宝石や鉱物もなく、特色も薄い。そこで、俺の姉さんがこの産業を思いついたんだ」

「呪いのアイテムを売ること？」

「そう。そして同時に解呪、もしくは防衛できるアイテムを売ること。俺たちの練り上げる呪法は扱いが難しく、まず同族しか解読できない。それ故に強固な呪い、もしくは防衛が可能になるのも同族の力のみだ。簡単なものから難しいものまで魔力のない存在でも扱える俺たちのアイテムは、爆発的に他の大陸でも売れ国益に繋がった」

「ま、何処の世界にも自分の手を汚さずに片をつきたい相手や、憎くて仕方ない存在くらいいるもんだろっしね」

「斬新で画期的だろう？」

にこにこ微笑む彼の笑顔はいつそ無邪気だが、その後ろに山と置かれるアイテムは無邪気じゃない。

だがそのアイデア自体は感心するしかなく、滑らかな動きで作り出されたミニチュア藁人形を手に、ふむ、と一つ頷いた。

【番外篇】幼馴染の彼らの日常

『どうして他の女からのプレゼントを受け取ったのよ！』

愛らしい顔を紅潮させ、怒りに柳眉を吊り上げる幼馴染を見て太郎は首を傾げた。

先ほど隣のクラスの女の子から調理実習の余りものと称して受け取ったマドレーヌを指して彼女はこんなに怒っているのだろうか。だが余りもので必要ないから、とくれたものを貰っただけでここまでする彼女の心境が彼にはさっぱり理解できない。

『だって、くれるって言うから』

だから素直にそう口にすれば、幼馴染は一瞬泣きそうな顔を見せ、そして手に持っていた何かを太郎の顔面に思い切り投げつけた。ビタン、と誰も居ない教室に音が響く。

『タローなんて、大嫌い！！』

黒髪を靡かせ走り去るその姿を、リボンをつけラッピングされた何かを受け止めながら太郎は呆然と眺めた。

「・・・ちよつとタローちゃん」

「ん？」

「香夏子ちゃん、猛烈な勢いで走り去って行ったんだけど」
かなこ

黒のパーカーの上下を纏う幼馴染が、それ以上に黒い髪を靡かせて振り向いたのを見て、太郎はひよいと肩を竦めた。

今現在二人が居るのは太郎の自室で、時刻は深夜1時半。昨日の夕方6時から始めたゲームは漸く佳境に入り、コントロールを握る輝弥は難しい顔をしている。

この幼馴染が勉強でもスポーツでもそんな顔をしているのを見るのはまずないので、その珍しい姿を太郎は堪能している最中だった。淡く色づく唇を窄め眉間に皺を寄せていても、幼馴染は美しい。それを満足行くまで本人公認で眺めるのを許される数少ない人間であるのを自覚している太郎は、その特権を行使するのが好きだった。

青いカーテンと本棚と筆筥、あとは寝るための布団が二つ。太郎の部屋は飾り気なくシンプルだ。それは輝弥の部屋もさして変わらないうが、彼女の部屋には太郎と、彼女の弟のクリスマスから贈られたプレゼントが飾られているので、この部屋よりももう少し華やかだった。そしてプレゼント品が置かれているのは太郎の部屋も同様で、今自分が抱いている細長い蛙の抱き枕は数年前の誕生日に目の前の幼馴染がプレゼントしてくれたものだ。毎日抱いているので些かくたびれてしまってるが、慣れてしまうとこれなしでは眠れない。そして輝弥もお揃いで紫色のを持っているので、今日のお泊まり用にと持参していた。

二人の布団の距離は狭いが、別に何かしようと思っっているからではない。これが二人にとって自然な距離で、傍に居るのが普通だからこそこの距離だった。

久しぶりに泊まる輝弥に、同じ部屋で寝ると告げたら両親は良い顔をしなかった。

一応年頃の男女だし、何かあったらと危ぶんでいるのだろう。そこは部屋のドアを全開にしておくというので了解してもらったが、それはそれで微妙な顔をされた。両親は輝弥を気に入っており、息子

には過ぎた娘さんだといいいながらも、娘になつてくれればと何回も口にしたのを聞いた。

だが今の輝弥にそれを言っても笑って受け流されるだけと彼らもいい加減に学習していたので、彼女の前でそれを口にするのはなかったけれど。

それに折角クリスが修学旅行でいないのだから、二人きりの時間を満喫したかった。変に口出されるのは望んでいないし、邪魔されるのはもつと嫌だ。そして誰も居ない家に輝弥を一人きりで置き去りにするのはそれ以上に嫌だった。

四泊五日で修学旅行に行ったクリスが帰ってくるのは日曜日で、今日は金曜日。徹夜で遊ぶ約束をした輝弥に先日友人が置いていったギラルゲーをやらせたは良いが、自分以上に要領よく進めていく手順には舌を巻く。彼女がゲームをプレイするのは太郎の家に来た時くらいなのに、太郎が所有するほとんどのゲームを彼女は自分より上手くこなす。

今だって育成パートと恋愛パートに判れているゲームの育成パートはすでにトップクラスの力を蓄えていて、魅力のステータスは攻略キャラを全員虜にするくらいだった。

次々に現れるキャラクターに、こんな隠しキャラが居たのかとむしろ驚いたほどだ。勘もよく順調にハーレムエンドへ向かう輝弥は、しかしながら一人に絞れない性格だった。

「そりや走り去るでしょ。香夏子ちゃんは主人公が好きなんだから」「でもただ余りもののマドレーヌ貰っただけじゃない。折角響子ちゃんしてくれるって言うのを断れるわけないし、それにあそこまで怒る必要もないでしょ」

「でもさ、香夏子ちゃんは自分のだけを受け取って欲しかったんだよ。ほら独占欲ってやつ」

「そう言われても・・・大体、香夏子ちゃんと付き合ってるわけで

もないのに」

「そこは乙女心でしょ。恋する女は難しいってね」

「何でタローちゃんが乙女心判るの」

「えー？だって俺の方が輝弥よりも乙女じゃない？」

「・・・乙女・・・タローちゃんが、乙女」

嫌そうに眉を顰め、何度も繰り返す幼馴染はどんな顔をしていても美しい。

美しさは罪だと言うが、まさしくその通りだろう。

美しすぎる故に友達は出来ず、ストーカーや奴隷候補が列をなし、善意と悪意を極端に向けられる。

彼女の苦勞を見ると、自分が平凡でよかったとつくづく思う。特別に人に好かれることもないが、嫌われることも無いから。

ぶつぶつと呟いていた輝弥は、何らかの形で自分を納得させたい。それ以上太郎に何か言うでもなく画面に向き直ると、再びゲームをプレイし始めた。

外ではついぞ見れない百面相に、布団の上で胡座を掻き膝に肘をつけて掌に顎を乗せた太郎は満足げに笑う。

その顔は凡そ平凡とは言い難い笑顔だったが、それを突っ込むものはその場に居なかった。

「タローちゃん、この卑弥呼ちゃんは何で毎日金印を押し売ろうとするの？」

「それは好意の裏返しだよ、輝弥」

「タローちゃん、どうしてこの妹は毎日人のベッドに入りこむの？」

「それも好意の裏返しだよ、輝弥」

「・・・タローちゃん。このゲーム、私には難解だよ」

「ははは！それでもハーレムルートに向かつてる輝弥は凄いな」

この主人公の好意に疎いくせに無意識関わった人間に好かれるところなんて輝弥にそっくりだ。

攻略本要らずの幼馴染の手腕を笑顔で眺めながら、そろそろ飲み物でも取りに行こうかとのんびりと太郎は考えた。

究極のシスコン

未だに笑いを滲ませる彼を眺めつつ、輝弥は一つ頷く。取り合えず教えてもらいたいことの一つは理解できた。だが、全ての疑問が解消されたわけではなく、納得しているのでもない。だから彼の笑いの発作が収まると同時に口を開いた。

「次の質問は、」

「次があるのかい？」

「ええ。判つてらっしゃるのに、確認しないで下さい」

「うん、ごめん」

割ときつい言葉だが、彼は気にせずに笑顔のままだ。その様子を眺めてから、輝弥はもう一度口を開いた。

「ここは魔大陸と仰いましたよね？私が住んでいる世界とは異世界である、と解釈して間違いないですか？」

「うん、大丈夫。ここは君達が住んでいた世界とは違つよ」

「この世界の構成は」

「大まかに分類すると、魔大陸、天大陸、妖大陸、人大陸の四つで世界は構成されている」

「種族は？」

「それは数え切れないほど。でも特徴を言うなら、人大陸に住む生き物は概ね寿命が短い。長寿と言われても百歳程度まで。逆に一番町名なのは妖大陸に住むものかな。彼らは消滅さえしなければ、永遠に近い時を生きる。魔大陸と天大陸はほぼ同じくらいの寿命で、大体一万歳くらい。でもそれは個々が持つ力により変わる。力の強さこそ、寿命の長さ、それが天大陸と魔大陸の生き物の特徴だね」

「敵対関係は？」

「現在は特になし。それぞれ好みはあるけど、別に拒絶するほどじゃない。必要とあれば貿易も行っし、留学するものもある。ああ、そうだ。俺達とは違っしがらみて生きてるのが竜族。ほとんどの種族が生まれた大陸で過ごすのに反し、彼らは自分の住みたい大陸を選びそこに住み着く。力は強力で、まともに相手が出来るのは魔族と天族の上位くらいだろう」

「上下関係は？」

「それぞれに王がいるよ。大陸代表が王と考えるといいね」

「どうして私達はこの場所に居るのでしょっか」

「俺が作つたはがきが君を選んだから。四天王を決めたでしよっか？それで術が発動するように作つたんだ。あれを作るのには五百年掛かつたんだよ」

「・・・そっですか」

一瞬、いらつときたが何とか怒りを飲み込むと、もう一度冷静な感情を呼び起こす。まだ知りたいことはあつた。

「何故私が魔王なんですっか？」

「それは君が君だから」

「もつと詳しい理由は？」

「他に言いようがないんだ。君が君だから選ばれた。他に理由はない」

随分な理由だ。淡々と質問を続けながら眉を跳ね上げる。

ちなみに先ほどから発言はしてないが、クリスは怒りで頬を紅潮させているし、太郎は 太郎はやはり笑顔のままだ。楽しそうに笑う姿から負の感情は見受けられず、もう少し怒るとかして欲しいと望む方が高望みに思えてくる。

脱力しそうになる体を、深呼吸すること立て直すと、自分が納得するために輝弥は唇を持ち上げた。

「私が世界に戻る方法がありますか？」

「うん、ある。戻りたいなら、だけど」

何かを含んだ言い方に、きゅつと眉根を寄せた。笑顔を浮かべたまのサダルメリクは、嘘は言っていないが真実を何一つ口にしない気がする。だがそれが何かを見つけないので、仕方なしにさらに質問を続けた。

「私の前任はあなたですね？」

「そう。俺こそが31代目魔王だ。良く判ったね？」

「あなたが魔王でなければ、つじつまが合わない部分が見受けられます」

「理由を聞いてもいい？」

「いいえ。今は、私が質問している最中ですから」

「そう」

くすくすと揶揄ったように笑う彼が、何故そんな顔をするかは判らないが、彼が上機嫌であるのは察せられた。それは大いに結構なことだ。

少なくとも彼が前魔王であつたなら、その力は強大なものだろう。

ならば敵にまわすのは、現時点で得策ではない。

冷静な頭が弾き出した結論に、輝弥は頷く。

「では続けて。あなたが魔王を降りた理由は何ですか？」

その質問をしたことを、輝弥は密かに後悔した。後悔したが、それはやはり先に立つものではないのだと後に納得もした。

今までで一番輝かしい笑顔をし、精悍な顔を子供っぽく崩した彼は、心底嬉しそうに頬を染めて輝弥へ告げたのだ。

「勿論、理由は一つだけだ。」

俺の、姉さんを探すためさ」

年上のこの上なく極上な容姿をした男が頬を染める光景を、輝弥は苦虫を潰したような表情で聞いた。頬を染めるのは乙女の特権と叫んでいた、太郎のゲームのキャラクターの台詞をしみじみと思いつく。あの時は何を言ってるのかと思ったが、今なら心から同意できそうだった。

眉間を押さえると、深々とため息を吐いた。もう、何を言っているか判らない。

異世界召喚された挙句、魔王にまで祭り上げられ、その理由が、『姉を探しに行きたいから』。

「お前ふざけるなよ！！この、シスコン野郎！！」

可愛い顔に似合わない啖呵を切った弟を、ぼうつとしたまま眺め、そう言えばよかったのかと一つ頷く。

「それ、クリスには絶対に言えない台詞だと思っけどな」

弟に向けた感動の眼差しは、笑顔の太郎の一言でそれもそうかと苦笑へと変わった。

召喚の理由は、涙が零れるどころか爆笑してしまいそうなほど理不尽なものだった。

譲れない戦い

えっ、本気で？

止まらない。止まらない。

その止まらない勢いに、輝弥の心は今や折れる寸前だった。幾ら見た目が冷静そのものであるうとも、普段と変わらず美しいままであっても、心の中のダメージは蓄積していく。

しかしそんな輝弥の様子にこれっぽっちも気づかぬ男は、輝かしいを通り越して蕩けそうな笑顔で頬を染めながら惚気た。

「俺の姉さんは、凄く美人でさ、魔界どころか世界に名を馳せてたんだ。その美貌は吟遊詩人が例えようとしても例え切れぬほどで、その輝きは太陽を落とすほどと言われ、その気高さは夜に昇る月を越えると言われた。頭も良く理解も早く機転が利き気も利いた。声は純銀の鈴を転がすより澄んでいて、その歌は星すら焦がれる程だ。美しく賢いだけではなく、力も強かった。僅か二百歳で三十代目の魔王となり、嘗てない平穏な地へと魔大陸を変えた。彼女は世界屈指の賢王で、求婚者がおらぬ日は無いほど求められた人だった」

憧れを宿した熱の籠る眼差しは、どう考えても普通の姉に送るものではない。少なくとも、輝弥が持つ常識に照らし合わせると、恋焦がれる若者と同じこの瞳は、少なからず厄介なものだ。彼の姉は四六時中この視線を受けていたのかと思うと、その忍耐力に感動する。こちらが若干引いているのも気づかず、サダルメリクは嬉しげに微笑みながら続けた。

「彼女は俺の魂の双子であり、上司であり、恋人だった」

「恋人っ！？」

裏返った声をあげたのは、輝弥ではなくクリスだ。

あまりのタイミングの良さに思わず自分の口が滑ったかと思ったが、そうではなかったらしい。大きな瞳をまん丸に見開いた彼は、その蒼い瞳にサダルメリクの姿を映すと顎を落とさんばかりに口を開いている。

ちなみに反対隣の太郎は相変わらず笑顔で平常心。滅多に表情も態度も崩さぬ彼は、やはり今回のこの言葉にも驚き一つ見せたりしない。マイペースもここに極まっている感じた。感心する。むしろ感動した。

無表情の奥で淡々とそんな考えをしている輝弥など気にせず、クリスの声を歓迎したらしいサダルメリクはへらっと笑った。なんとも美形らしくない気の抜けた笑い方であった。

「そう、恋人」

「でも、姉弟なんだろう！？何で恋人なんだよ！近親相　　っ！」

途中まで言葉を発しかけ、慌てて口元を両手で覆ったクリスは上目遣いで輝弥を見上げた。不味い言葉を口にしたと全身で訴える彼に、そこまで言えば何が言いたかったか良く判るがと思いながらも知らぬふりで微笑みかける。すると安心したように肩の力を抜いたクリスは、嬉しげに微笑み返してきた。

相変わらず可愛いお人形のような笑顔だった。

しかし十人居れば九人は見惚れるその笑顔も、サダルメリクには通用しない。

「魔族に近親相姦なんて考え方はないよ。天族、妖族にもだ。そんな考えを持つてるのは、人族くらいのものだろう？」

「けれど血が濃くなれば色々子供に不都合が出る場合があるだろう？」

「いいや、ないね。俺たちは血に関係なく子を生ず。君が想像する不都合が起きた事例は聞いたことがない。血の濃い同士で番になる

のは珍しくない」

「なら、親子で子を生す場合もあるってこと？」

「うん。まあ、流石にそれは珍しいけど。好きになったなら仕方ないだろう？」

「・・・なんてモラルがない種族だ」

眉間に皺を寄せたクリスが呟くと、サダルメリクは先ほどとは違う顔で笑った。

雰囲気の変化に眉を跳ね上げる。あまり性質がいい笑い方には見えない。

だが、クリスはそんな変化に気づかなかったのか、渋い顔をしたままサダルメリクを睨みつけていた。

「モラル？モラルじゃ恋は出来ないよ。俺たちは美しく強い者が好きだ。美しい者は大抵力が強く、傍に置くには好ましい。それに加えて俺の姉さんは賢く優しかった。独占したいと思って何が悪い？」

「別に、悪いとは言っていない。モラルがないと言っただけだ」

「ふうん。　　なら君は、輝弥ちゃんが他の誰かに奪われてもそんなこと言ってられる？」

「何だと？」

輝弥の名を出したことで、クリスの雰囲気も一変する。

可愛らしい顔を怒りで濁し、苛立ちを含んだおかげで瞳の色が濃くなる。毛を逆立てた子猫のようだが、生憎この子猫は見た目よりも力が強い。

輝弥に関しては他のものよりも沸点が低いのを知っているので、手を出さないか内心ではらはらしながら

見守っていると、ぽんと肩に手を置かれた。

振り返れば太郎がいつもの笑顔を向けている。この緊迫した雰囲気の中、空気を読まない態度はさすがだ。

「大丈夫だよ、輝弥」

「何が？」

「どうせただのシスコン同士の喧嘩だし。馬鹿は放っておくに限る」

笑顔で放たれた毒舌に、慣れているがひくりと口端が引きつる。

平凡な容姿に惑わされがちだが、山本太郎という男は輝弥が知る限り最も肝が据わった男だった。笑顔で切り捨てる厳しさを、彼を平凡と思い込んでいる面々に教えてやりたい。

しかしながらそのチャンスは当分巡ってきそうになく、帰る手段を問うつもりだった相手は別の世界に旅立っている。

敢えて空気読まない、AKYの太郎の強さを少し分けて欲しいところだ。

太郎が輝弥に忠告する間にも、二人の間はヒートアップしていった。

「言っておくけどね、僕のお姉さまは『僕の』だ。どこの馬の骨かわからない輩においそれと差し出すわけがない。お姉さまは麗しく妖艶で夢で庇護欲を掻き立てられる賢く、お前の『姉さん』より百倍は美少女だが、僕がお姉さまを誰かに譲る気はこれっぽっちもない。お前みたいに姉に逃げられるような馬鹿には判ないだろうけどね！」

「ふうん？俺の姉さんが君の『お姉さま』に劣るとも言いたいのかな？」

「言いたいんじゃない。そう、言ってるんだよ間抜け馬鹿」

その瞬間、冷たい風が吹きぬけたのを、確かに感じた。

高らかに鳴る架空のゴングで、彼らの戦いの火蓋は切って落とされ

これ以後幾度もこんな遣り取りをする犬猿の仲になったのは、どうしようもない運命だったのかもしれない。

隣で美味しそうに置いてあった急須で勝手に入れた茶を啜る幼馴染を横目に、輝弥は疲れたため息を落とした。
帰る方法は、まだまだ聞けそうもない。

願うのは一つ

「別にね、無理難題を押し付けようって言うんじゃないよ」

心持ち乱れた髪を掻き揚げ、サダルメリクは微笑んだ。掻き揚げた髪の間隙から見える額にたんこぶが見えた気がして、そっと視線を逸らしつつ頷く。

結局彼ら二人の譲れない戦い　　しかしながら、極端に低レベルな　　は、太郎がお茶を二杯飲み、喉が潤されたところで更に小腹が空いたらしい彼が、茶菓子がないか家捜ししようとしていたところで一区切りついた。

お互い本気ではなかったのだろうが、二人とも折角の美形であるのに所々顔が擦り切れ、髪もぼさぼさになっている。乱れていた服は調えられたが、合わない視線が精神年齢の高さを教えてくれ、眉間を白い指先で押さえる。

何もしていないのに疲労が溜まった輝弥は、太郎が入れてくれたお茶を一口啜った。ちなみに家主の許可を得ず家捜ししようとしていた幼馴染は、何食わぬ顔で請求した茶菓子を咀嚼している。和菓子に似ている気がするが、黄土色とモスグリーンが混じった一見すると柔らかそうな饅頭に見えるのに何故か煎餅のような音がするその味の感想は恐ろしくて聞けていない。燃費が悪い太郎は、味の判別はつくものの基本的に文句は言わない男だから放っておくに限るだろう。

遠くに意識を飛ばしかけた輝弥を連れ戻すように、名前を呼んだサダルメリクは、年上なのにまるで年下に見える眉を下げた情けない笑みを浮かべた。

「俺は君に、無理難題をおしつけないわけじゃないんだ」

「抽選で魔王に選ぶのは無理難題じゃないとでも言うんです

か？」

「うん。君しか居なかったから。俺の願いを叶えられる相手が、君しかいないから」

彼には罪悪感が一切ない。眉は下げられているが、それは輝弥をここに無理に呼んだからと言うより別の理由があるように見える。

切なげな様子に戸惑いを覚える輝弥とは違い、苛立ちしか覚えないらしいクリスがちゃぶ台を叩いた。

「ふざけるな。お姉さまを無理やりに呼んでおいて、謝罪の一つもないのか！」

「俺は謝罪するようなことはしていない」

「見たことも聞いたこともない世界で、何をさせられるか判らないつてのに、無理やり呼んで謝罪もなしか！大した謙虚さだなっ」

「違う。俺は無理やりに呼んでない。彼女が応えたから、ここに呼んだんだ」

「四天王の欄に名前が入ればここに来るように？そんなの騙まし討ちと変わらないだろう！」

「それでも、だ。俺だけの力でここに彼女を呼ぶことは出来なかった。俺は無理やりに呼んだんじゃない」

水掛け論だ、と心の内で呟く。

彼らが輝弥を理由に熱くなっているのは判るが、何故か輝弥はそこまで冷静さを失えなかった。

異世界召喚はクリスが言うように騙まし討ちだと思う。はがきを読んだどこにもそんな説明はなかったし、見逃したはずがない。『異世界に召喚します』なんて一文を、例え輝弥が見落としたとしても、目ざとい太郎が見落とすはずがない。

だから本当に騙まし討ちで、こちらに来る意思是輝弥には全くなかった。そして、自分の軽率に巻き込まれた太郎とクリスにもなかつた。

たはずだ。

異世界と言われ、目の前で色々と見せてもらっても、未だにここが異世界と実感がわかない。どこか以前に住んでいた世界よりも空気が馴染む気がするし、田舎のような風景は懐かしさすら感じる。サダルメリクは一切悪びれない。自分は悪くないと主張し、事実本心だとその瞳が語っている。それなのにその瞳は苦しげで、何かを希求して落ち着かない。

怒ってもいいはずだ、と自分に囁く。けれど、この人には怒れない、とすぐに何処から返事が来る。

年上の体格がいい精悍な顔つきの男なのに、目の前の人がクリスと同じくらいの少年に見え、輝弥はため息を零した。

その音は些細であつたはずだが、口論していた二人はぴたりと口を噤むと視線を向ける。蒼い瞳と紅い瞳。対照的な色を持つそれは、何故か同じに輝弥には映つた。

「お姉さま！お姉さまも何か言ってやってください！それで早く帰りましょー！今日の晩御飯は僕お手製の煮込みハンバーグだったんですよ。昨日から仕込みをした傑作品だったのに」

「お、本当？じゃあ、早く帰らなくちゃ。おかわりある？」

「黙れ！誰がお前のためのおかわりなんて作ってあるか！お

姉さまの分はきっちりとおかわりありますからね」

どさくさに紛れて腰元に抱きつき胸に顔を埋めながら上目遣いで見上げてくる弟の髪を梳くと、黙り込んでしまったサダルメリクを眺める。

先ほどまでの饒舌な様子はなりを顰め、唇を噛み締めて俯く姿は何かにかに傷ついたように悔しげだった。

驚き、目を瞬いて眺めていると、きつと顔を上げた彼と視線が絡む。

鋭い眼光と心を決めた雰囲気は、彼の容姿を一層引き立てた。真面目な顔をしているとやはり彼は輝弥の人生の中でもトップ3に入る美形だろう。後にも、先にも。

クリスを腰に巻きつけたまま彼を見ていると、その視線に気づいたクリスが景気良く舌打ちする。一見王子みtainな見目なのに、随分と柄が悪い。

そんなクリスの凶器にもなり得る視線を真っ向から受け止めたサドルメリクは、低く唸るような声を上げる。

「俺はっ・・・俺には、どうしても輝弥ちゃんが必要だった。だから、俺は呼んだんだ」

「何をさせるために？魔王なんて碌な職業じゃないだろう？目的は世界征服か？勇者の抹殺？人間の支配？それとも自国を豊かにするため？生贄にでもするつもりだったのか？いずれにせよ、四天王まて選ばせるなら安全な『何か』をさせるために呼んだと思えない。お前が出来ない『何か』をさせるためにお姉さまを呼んだのなら、そんなのは僕は許さない。お姉さまが傷つくのを、僕は許容できない」

きっぱりとした宣言は、怒鳴り声ではなく淡々としたものだったからこそ胸に響いた。クリスは輝弥以外には一人の例外を除き、とんでもなく高飛車で傲慢だ。けれど輝弥に対しては、主を護る番犬の如く忠実でもある。

静かに焰を纏う彼の頭を撫で、輝弥は眉を八の字にした。

本来の彼の怒りは輝弥にこそ向けるべきものだと思う。輝弥は確かに何も知らなかったが、浅慮な行動を起こし異世界への召喚の手続きを済ませたもの輝弥だ。クリスと太郎は巻き込まれただけで、本当の意味で被害者だ。今まで輝弥の所為で様々なトラブルに巻き込んできたが、今回のこれは間違いないトップだと思う。なのに彼は輝弥を怒るのではなく、輝弥を守ろうとする。それがとても申し訳

なく心苦しい。

あまり表筋が発達していないのか、表情が動かない輝弥の僅かな変化はわかりにくいとよく言われるが、すかさず隣から大きな掌が伸びてきて頭を撫でる。心地よい触れ方に目を細めると、低い声で幼馴染が笑ったのが聞こえた。

彼は輝弥の感情の機微に彼女以上に聡い。主の機嫌を悟る猫のように、慰めを与えてくれる。輝弥の心が落ち着くと、手を離れた太郎が言葉を発した。

「それなら、何故あなたは輝弥を呼んだんですか？」

「何故！？何故と君が言うのか」

「ええ、言いますよ」

怒りを含んだ声は、太郎に向かっていく。大方自分たちより先に目覚めていた太郎には理由を話していたのだろう。

あまり会話しているように見えないのに、太郎への怒気がクリスに向かっていたものより余程酷く感じ、背筋を寒いものが走った。

「理由など、一つだ。五百年前から、ずっとね。世界征服？」

そんなものは興味ない。どこかの野心ある存在が勝手にやりたければやればいい。勇者の抹殺？神すら恐れぬ存在が、勇者如きを懼れるはずがない。そんなもの目の前で自分で縊り殺す。人間の支配？何故そんな面倒なことをしなければならぬ？人は短命だが欲望が高い。誰かのものを奪い、それを当然とする。そんな種族じゃない。自国を豊かにする？そんなものは自国の民が自分です。俺の民は努力が出来るものばかりだ。生贄にする？誰のための生贄にするんだ？何故彼女を誰かに捧げなくてはならない。彼女こそが、俺の唯一の望みを叶えられるのに」

一息に告げたサダルメリクは、怒りに紅潮した顔を隠すことすらし

ない。真剣な眼差しは輝弥だけを映し、同時に何かを懇願するようでもあった。

その顔を見て、何故か泣いてしまうのではないかと戦慄が走る。自分よりも優に何百歳も年上で男で身長も高く精悍な顔つきに立派な体格をしたこの人は、どうみても怒っている。なのにどうしてか今にも崩れ去ってしまうのではないかと思える脆さがあった。

思わず伸ばそうとした手は、隣に居た人により阻止される。それは普段輝弥が他人に関わるのを酷く嫌うクリスではなく、絶えず笑顔を浮かべて何事も許容する太郎で、掴まれた力の遠慮のなさに瞬きした。

だが彼の態度に疑問をぶつけるよりも、目の前のサダルメリクが行動する方が早かった。

「俺の望みは一つだけだ。ただ、会いたい。姉さんに、会いたいんだ」

「・・・お前」

「この世界には居られないと、消えた姉さんの顔を今でも覚えてる。忘れて幸せになれと言われたけれど、それはどうしたって無理だ。俺は、姉さんがいないと幸せになてなれない。姉さんが俺の幸せなんだ。会いたい。ただ、会いたいんだ」

真摯な響きは偽りの欠片もない。苦しげに吐き出された声には恋情が色濃く混じり、露にされた想いの強さに顔が赤くなった。

赤い瞳は涙一つ滲んでいない。けれど、泣いている。きっと彼は泣けないのだ。泣かないのではなく、泣けないのだろう。それが身体的理由か精神的な理由か判らなかつたけれど、直感に似た判断は間違つてないと確信する。

胸の奥が痛くなった。まるで心臓を鷲掴みにされたような激しい痛みに上半身を折ると、慌てたようにクリスが支えてくれた。

気がつけば涙が頬を伝っている。想いの強さに当てられたのだろう。

例え姉弟であつたとしても、この想いの強さは本物で、彼の抱く思慕も本物だ。

「私が居れば、あなたはお姉さんに会えますか？」

「あ。他の誰かでもない、あなたが居れば、絶対に俺は姉さんに会える。・・・頼む、何だつてする。衣食住も全て保障するし、危険からは護る。この命が欲しいのなら、姉さんに会えた後なら捧げたっていい。だから、頼むから・・・俺を、姉さんに会わせてくれ」

吐露された言葉に引き込まれるように、顎が引かれる。

けれどこれだけで頷くのは許されない。

輝弥は保証がなければ行動できない。この場に居るのは、自分だけではなかったから。

「お姉さんに会えたら、私の望む元の世界に戻してもらえますか？」

「約束しよう」

「判りました」

「姉さま!？」

「元の世界に戻りたいでしょう、クリス？」

「でもっ!？」

「いいじゃない、クリス。輝弥がいつって言ってるんだからさ。俺たちも付き合つていいんでしょ、勿論」

「お願いできる？」

「当然。クリスはどうする？」

「お姉さまが残るなら、僕も残るに決まってるだろ！いいですか、お姉さま。絶対に危険なことはしないと約束してくださいね！」

可愛らしい顔に深い眉間の皺を刻んだクリスに、ありがとう、と囁

く。仕方ないですと苦笑した彼は、優しく輝弥の頬を撫ぜた。
ごめんね、と囁くと幼馴染はトラブルはいつものことだと笑う。二人が居るだけで心は守られ、傷つけられることはないだろう。
甘えていると十分理解しているが、彼らが残ってくれて心底安心した。

「・・・ありがとう」

搾り出すように礼を告げる彼に、輝弥は少しだけ微笑んだ。

「あなたは、従者で決定ですから」

白く華奢な手にはいつの間にかはがきとペンが握られ、サドルメリクの心からの笑みはあつという間に引きつった。

異世界の夕食（前書き）

一月近くぶりの更新です。

遅くなつてすみません。そして読んでくださる皆様、本当にありがとうございます！

異世界の夕食

「いやあ、やっぱり大勢で食事はいいね」

にこにこと上機嫌に笑う男を横目に、箸を操り大皿から唐揚げを一つ摘む。

大陸により主食やその際利用する道具も違うようだが、魔大陸は現代の日本と極めて近い感覚らしい。醤油もどきや味噌もどきなどあり、出汁は昆布もどきから搾取した。

これはとてもありがたかったが、実際の名称やどこからどう搾取してきたものかは聞いていない。

『一度聞いたら、聞かなかったことにはできないよ?』と笑顔で断言した太郎の言葉に異論はなく、知らなければ美味しいねで終わらせるものを知ってから後悔したくなかった。

知らなければ美味しいの一言だ。食卓に上った食材は自分の知る素材で作った故郷の料理と思い込める。

台所は時代劇で見るとあるような竈や水瓶が置いてある半面、調理器具は包丁やまな板以外にもお玉や泡だて器もあった。

何より驚いたのは火や水の扱いで、それらの調整は全てサダルメリクがしてくれた。

力を使って料理すると教えてくれたが、どこからともなく炎を出現させたり、空中から水を出したりとそこだけはとても不思議だった。お釜と鍋が置いてある竈の炎は燃料がなくとも燃え盛り、サダルメリクに頼めば簡単に強めたり弱めたりしてくれる。

これでも十分凄いのに普段は調理すら力を使つてすると言うのだから驚いた。

もっともここまで全てを力に頼る魔族は少ないらしく、やはりあばら家に住んでいても魔王は魔王だったということだろう。

素材が何だかわからなくとも、見た目が同じで味もほぼ変わらなければ調理は出来る。

太郎とクリスと輝弥の合作で今日の献立はご飯とジャガイモとえのきの味噌汁に肉じゃがと唐揚げだ。

ジャガイモの割合が多いのは何故か大量にそれが土間に積み上げられていたからで、大した理由はない。

全て『もどき』と注釈はつくが、味はそのもので美味しかった。

人様の家の台所を拝借するのは失礼に当たる気がするが、その主が気にしないと言っていたのでいいだろう。

そしてホストがもてなすものだと思かましく言えない理由もある。

いくら強引に招かれたとしても、この家の主はサダルメリクで、輝弥たちの立場は居候に過ぎなかった。

そのサダルメリクは三人の料理が口にあつたらしく、先ほどから笑顔が絶えない。ついでに箸の動きも絶えない。男性だからだろうかその摂取量は半端なく、それを考慮して多めに作られたおかずが徐々に山から姿を消した。

ちなみに太郎も体格に比例してよく食べる。見た目が小さいが将来に賭けているクリスも食事の量が多い方だ。普段はそれでも太郎に劣るのだが、サダルメリクに対抗しているのか、今は胃袋を破ろうとする勢いで食べていた。

それを眺めながら、早々に自分の分は別皿に取り分けていた輝弥はうつそりと眉を顰める。幼馴染や弟と反し、輝弥はどちらかと言わずとも小食だった。見ているだけで胸焼けしそうな食べっぷりに、段々と気分が悪くなる。それでも最低限取り分けられた分は食べなければ太郎とクリスが心配するので、気合で乗り切った。

箸が行きかう小さな合戦場で両手を合わせてご馳走様と呟きリタイヤを宣言した輝弥をサダルメリクが見た。

「あれ？もう食べないの？」

「私、燃費がいいんです」

「俺の姉さんと一緒だね。俺の姉さんも小食だったんだ。小鳥くらいの量しか食べなくて、でも俺の分を分けようとすると『私はいいから全部食べなさい』って言うってくれる、優しい姉さんだったんだ」

「そう、なんですか」

嬉しそうに語るサダルメリクに、輝弥は内心でこっそりと思う。それは好意ではなく、遠まわしなお断りだったのではないかと。

見るからに彼には悪気はなさそうだが、もし輝弥が相手なら全力で遠慮被る。何しろ太郎と張り合い、輝弥の軽く7倍は食べていそうな彼のこと、少しの量は輝弥にとって大量に等しい。実際に彼の姉が輝弥ほど小食だったか知らないが、それは苦行に違いない。

微妙な笑顔で返事を濁すと、唐揚げを飲み込みお茶で喉を潤したクリスが噛み付かんばかりの勢いで反論した。

「それは遠慮じゃなくて、嫌がられてるんだよ！空気くらい読めよな。そんなんだから勝手に人を異世界に呼ぶなんて空気読めないこと出来るんだよ。そんなんだからお前は『前・魔王』でも『従者』にしかねないんだよ」

憎々しさたつぷりな言葉には、クリスの怨み辛みプラス対抗心が盛り込まれている。

本人を置いての『姉自慢対決』は彼らの中で継続されており、どうやらその熱はまだ冷めて居ないらしい。こちらの世界に居る限り続きそうだ。

対抗心はそちらだが、怨み辛みは異世界に無理やり呼び出されたことだ。どこからどう見ても日本の田舎風景の雰囲気のある場所は、クリスには異世界だとしても納得出来なかった。むしろそれが

当然なのだろう。

自分でもどうしてか判らぬが、輝弥はこの世界が異世界だと安易に納得してしまった。その理由は信賴する幼馴染の一言だけとも、目の前の美貌の青年の言葉だけとも考えにくい。

輝弥の曖昧な心を読むように反発していたクリスだったが、先ほど料理の支度の際、疑いようもなくサダルメリクが力と呼ぶものを見せられ、納得せざるを得なくなった。実際に食事を摂っているこの部屋も、彼の力で明かりが保たれている。

見てないものは信じない。けれど見て経験したからには、信じるしかない。現実主義者でありながら合理性を持つ彼らしい思考だが、納得しても苛立ちは消化されず未だに形に見える異世界の象徴にきつく当たっている。

だが手が出て足が出そうな先ほどの雰囲気よりは大分いいので、これは仲良し喧嘩に分類しても構わないだろう。

クリスの言葉を切欠に喧々囂々とやり合う二人を眺めていると、二人が箸を止めた隙に最後の唐揚げを掻っ攫った太郎が輝かしい笑顔を浮かべた。

「はははっ。いいな、二人とも仲が良くて。俺も混ぜて欲しいくらいだ」

『断る』

クリスとはかく、サダルメリクまで眉を吊り上げて即答した。

厳しい口調だったのに、太郎は全く傷ついた様子も見せずに唐揚げを頬張る。

笑顔で咀嚼を続ける彼を見て、輝弥は改めて思った。

やはり、この幼馴染はどこまでも凄い、と。

開放しにされた障子の外には、閑静な庭と夜空が見える。

随分と大きく見えるが、こちらでも月は一つだった。

明日は今後の予定を立てると言っていたが、話し合いは無事に為されるのか。

現代より明るい星空は、答えをくれずに煌くだけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9022m/>

抽選魔王

2010年11月9日21時42分発行